DP（ディプロマポリシー）アンケートにみる大学授業の省察
～『教育方法論』を中心として～

学校教育講座（教育学）　白松　賢

１．授業の概要と DP への対応

本授業の目的は、「(1)学習者の立場から、教育者（指導者・支援者）の立場へ意識・態度が転換できる、(2)教師力量の知識や技能を獲得し、向上することができる、(3)教育方法に関する知識を獲得し、基礎的実践力を身につけている、(4)自らが実践を作り上げる思考力を持ち、実践的なスキルを身につけている」の４つである。とりわけ、教育方法学的専門知識及び技能の修得をねらいとしている。

授業の内容は、1 回目：教育方法学の成立と展開（知識理解）、2 回目授業を創る－学習指導要領の拘束性と指導案の構造、３回目：授業を創る　－教師のコミュニケーション力と特別活動、４回目：教授法の背景と実践の違い－特別活動の開発的／解決的アプローチ、5 回目：授業における学びを問う　－発問－、6 回目：教師の授業力量・・・教材研究から授業化まで、7 回目：授業のスキル　－指示・板書・説明・指名－、8 回目：まとめ、という流れで構成しており、前後しながらも、ほぼ予定通りの内容を展開することができた。

２．指導上の工夫

本講義を展開するにあたって、学習者を想定した工夫を３点行っている。第一は、教育実習前の段階として、指導案の基本構造を十分理解していない学生が多いことから、教材研究を行う上での学習指導要領の拘束性と指導案の基本構造について、丁寧に事例を示しながら、説明をするようにしていることである。とりわけ、愛媛県内の優れた実践を行っている先生方の指導案について、学校段階の違いや教科の違いなどを丁寧に例示し、具体的な実践を想定しながら授業を行っている。第二は、実習前に特別活動論を受講できないことから、特別活動の基本的理解を深める為に、開発的アプローチの実践事例について、SST、SGE や AT などを実際に体験的に学習し、実習ですぐに行うことのできる内容を取り入れていることである。本来であるならば、解決的アプローチについて教示すべきであるが、実習前には理解が難しいことから、学習指導要領解説から基本的な考え方のみを教えている。第三は、授業のスキルをパーツで分解し、それぞれのスキルのポイントを簡潔に伝えていることである。「発問」のようになかなか上達しにくいスキルよりも、「指示」「指名」「説明」「板書」といった比較的実習でも留意しやすいスキルの修得に力点を置いている

これらの工夫は、学生の授業感想を呼んでも、比較的高く評価されていることがわかる。

３．DP への対応

本講義は実践的な内容を中心とするものの、受講生は志望する教科や学校段階は異なるため、知識理解に近い形での技能の修得となる。そのため、次頁に示している表の中でいくと、DP1A（教育に関する知識の修得）、DP3A（教育活動に必要な高い技能

の修得）が主となっているが、DP3A についてはある程度の限界が前提となっている。

それでは、実際のアンケート調査結果（表１）から、授業のねらいが学生の意識においてどのように理解されているかをみてみたい。

表１から明らかになっていることは、本授業の中で最も DP に対応していると捉えられている項目が DP2A(教育をめぐる現代的諸課題の理解)となっていた。これは、授業内容において、「いじめ」「コミュニケーション能力の変容」といった現代的課題とリンクさせながら、特別活動の指導法を教授したことと深く関わっていると考えられる。この 82.4%という高い数字は、授業者の意図とは異なる結果であった。しかしながら、現代の教育課題に、学生たちは高い関心を持っていることが理解され、今後の授業内容に反映していきたい内容である。

その次は、本授業の主たるねらいである DP1A について、「対応している」76.5%、「どちらかといえば対応している」両方をあわせると 100%と概ね、授業のねらいを達成していた。しかしながら、DP3A については、58.8%と低く、講義・ワークショップ形式の授業展開では限界があることが示された。今後は、ロールプレイなどを取り入れながら、実際に学習した授業スキルを活用して体感させる工夫が必要となる。

今ひとつ、本調査の結果明らかになったことには、DP5A の専門的職業人としての使命感や責任感の形成が比較的高く回答されていることである。ここには、教育方法という知識・技能を中心的なテーマとしながらも、教職という職業のやりがいや責任について学生が考えながら受講していることをみてとることができた。

今後の課題ではあるが、教育方法論の授業内容を改善して３年が経つ。次年度は、「学力」をテーマに、「外発的働きかけ」と「内発的働きかけ」の両面の学習論から、教授方法の発展を理解し、学生の受験型学力観・学習観をゆさぶりながら、教育の専門的な学びの面白さを伝える学習内容を加えて改善を行いたい。

表1　教育方法論

総合人間形成 スポーツ健康 芸術文化	対応している	どちらかといえば対応している	どちらかといえば対応していない	対応していない	計
DP1教育に関する確かな知識と得意とする分野の専門的知識を修得している DP1A：教育に関する知識の修得	76.5%	23.5%	0.0%	0.0%	100.0(34)
DP1B：得意分野の専門的知識の修得	38.2%	41.2%	8.8%	11.8%	100.0(34)
DP2教育をめぐるさまざまな現代的課題について論じ、適切な対応を考えることができる。 DP2A：教育をめぐる現代的諸課題の理解	82.4%	17.6%	0.0%	0.0%	100.0(34)
DP2B：それへの適切な対応策の在り方. . .	61.8%	35.3%	2.9%	0.0%	100.0(34)
DP3教育活動に取り組むため、高い技能と豊かな表現力を身につけている。 DP3A：教育活動に必要な高い技能の修得	58.8%	35.3%	5.9%	0.0%	100.0(34)
DP3B：教育活動に必要な豊かな表現力の修得	47.1%	44.1%	8.8%	0.0%	100.0(34)
DP4自己の学習課題を明確にし、理論と実践を結びつけた主体的な学習ができる。 DP4A：自己の学習課題の明確化	44.1%	44.1%	11.8%	0.0%	100.0(34)
DP4B：理論と実践を結びつけた主体的な学習への意欲	44.1%	47.1%	8.8%	0.0%	100.0(34)
DP5専門的職業人としての使命感や責任感と多世代にわたる対人関係力を身につけ、社会の一員として適切な行動ができる。 DP5A：専門的職業人としての使命感や責任感の形成	64.7%	23.5%	2.9%	8.8%	100.0(34)
DP5B：多世代にわたる対人関係力の育成	44.1%	41.2%	11.8%	2.9%	100.0(34)